

[教育方法一般]

「ステーション授業構想」をもとにした教育活動が学級集団に及ぼす影響に関する事例研究

寺岡 幸作*

1 問題の所在と目的

文部科学省(2017)は学習指導要領において、これからの時代に求められる資質・能力の柱の一つとして、「学びに向かう力、人間性等を涵養すること」を挙げ、「よりよい生活や人間関係を自主的に形成する態度」の育成が必要であるとしている。また、中央教育審議会(2021)は「令和の日本型学校教育(答申)」の中で、多様な他者と協働しながら、他者を価値ある存在として尊重し、必要な資質・能力を育成することが重要であると述べている。多様な他者とよりよい人間関係を形成し、協働していく力は、これからの時代において必要な資質・能力の一つであると考えられる。

近年、友達関係の偏りや、つながりを広げていこうとする気持ちのもてない児童の存在が挙げられている。教育活動全体で児童の人間関係形成の構築に取り組んだ保坂(2014)は、全校体制でクラス会議や協同学習を実施したことで、Q-Uの学級満足度が上昇したことを報告している。さらに、会沢(2014)は、ソーシャルスキルトレーニング(以下、SST)の実施により、高学年のQ-Uの承認得点、被侵害得点、友達関係得点の項目において有意な正の変容があったと述べている。つまり、クラス会議や協同学習、SSTなどの児童同士のつながりをつくる取組が、学級満足度の上昇に寄与することが窺える。しかし、クラス会議においては実施の難しさや授業での時間の確保・継続性に課題がある。また、川口・赤坂(2020)は、協同学習における学習面と対人技能面の同時学習の難しさや、学びの深まりに課題があると述べている。さらに、SSTで習得したスキルや行動の般化が起こりにくいということが課題として指摘されている(佐藤ら, 1993)。これらのことから、クラス会議や協同学習、SSTなどの取組に、一定の効果はあるものの、それぞれ単体での実施においては課題があるといえる。

文部科学省(2016)は、「これからの時代に求められる資質・能力を育むためには、各教科等の学習とともに、教科等横断的な視点に立った学習が重要」とし、カリキュラム・マネジメントの重要性を示唆している。人間関係形成におけるカリキュラム・マネジメントの取組として、赤坂(2011)によって提唱された「ステーション授業構想」がある。この「ステーション授業構想」は、人間関係の形成において効果的な価値やスキルや態度で教科等をつなぐという視点で一貫した指導を可能とするカリキュラム・マネジメントである。鳥居ら(2022)は、「ステーション授業構想」により、クラス会議やSSTで学んだ人間関係形成に必要な価値やスキルや態度を学習面や生活面で活用することが共同体感覚の向上や協働的な学習過程に正の影響を与えたと報告している。これらのことから、「ステーション授業構想」による教育活動は、上記のクラス会議や協同学習の課題、SSTの般化への期待がもてる。

会沢(2014)は、Q-Uにおける満足型学級は高い共同体感覚を有した児童からなる学級のことであるとしており、共同体感覚と学級満足度の関連を指摘している。このことから、「ステーション授業構想」が共同体感覚と関連があるとされている学級満足度への影響も期待できる。しかし、「ステーション授業構想」をもとにしたこれまでの研究では、学級満足度への影響について検証されていない。そこで、本研究では、「ステーション授業構想」をもとにした教育活動が学級満足度にどのような影響を与え、児童同士がつながり協働する学級集団づくりへ有効に機能するかについて明らかにすることを目的とする。

2 研究の対象と方法

(1) 調査対象・調査期間

新潟県公立小学校 第3学年A組 21名(男子9名・女子12名) / 令和5年4月8日~令和5年7月21日

(2) 研究構想

① 「ステーション授業構想」

本研究では、赤坂(2011)の「ステーション授業構想」をもとに、図1に示すように、クラス会議・SSTを「ステー

*長岡市立神田小学校

「ステーション授業構想」の中核に位置付け、人間関係の形成において特に大切にしたい価値やスキルや態度を学ぶ。そこで学んだ価値やスキルや態度を各学習場面や生活場面において活用し、教育活動全体で般化・定着させていくことで、児童同士のつながりが深まると考える。また、「ステーション授業構想」のコンセプトの「①快・感動の体験②継続性③日常化」の3つを保障しながら実践していく。

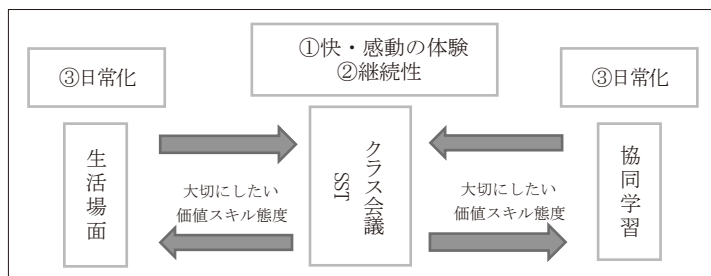


図1 本研究における「ステーション授業構想」

② 大切にしたい価値やスキルや態度

対象学級の学級目標は「全校にやさしく、ふわふわ言葉、男女関係なく協力し合う、かっこいい3年生」である。この学級目標をつくる際に児童から出された、学級で大切にしたい考えや行動をもとに、「友達の話をつかろうと最後まで聞く」「誰とでも協力する」「男女関係なく誰とでも仲良くする」「ふわふわ言葉をつかう」「相手意識」等、他者とかかわる上で大切にしたい価値やスキルや態度を設定し、教室に掲示した。調査対象校の児童の実態に合わせ、事前に大切にしたい価値やスキルや態度を示し、意識して学習や活動に取り組むことができるようにする。このように、大切にしたい価値やスキルや態度の良さや効果を実感させ、それぞれの場面や実態に合わせてながら、般化・定着を図っていく。

③ 「ステーション授業構想」の中核としての学級活動

調査対象学級では、表1のSSTを1週間に1回程度、朝活動や学級活動の時間に行うように設定し、「ステーション授業構想」のコンセプトの1つ「②継続性」が保障されるようにする。プログラムの選定は、赤坂(2011)を参考に作成した。また、表2のように1週間に1回程度学級活動の時間にクラス会議を実施することによって対人技能の習得と「②継続性」を保障できるようにした。

表1 SST活動内容

回	プログラム名	活動内容	大切にしたい価値やスキルや態度
2	「絵リレー」	1つのテーマの絵をグループで協力して完成させる活動	誰とでも協力する
4	「S-1グランプリ」	1~20の中で一番小さい数を他のペアと重ならず言い当てる活動	ふわふわ言葉を使う
2	「リーダーを探せ」	全員に動きの指示を出すリーダーを当てる活動	男女関係なく誰とでも仲良くする
2	「ウィンクキラー」	ウィンクで相手を凍らせるリーダーを探す活動	男女関係なく誰とでも仲良くする／相手意識

表2 クラス会議の流れと活動内容

順番・クラス会議の流れ		回数・活動内容(活動日)	
1 円(輪)になる	5 解決策の出し合い	1 「学習での切りかえについて」(5/11)	5 「やさしく注意するには」(6/15)
2 輪になってかわろう(SST)	6 解決策の決定	2 「最後まで聞くには/関わりを増やすには」(5/18)	6 「分け隔てなく遊ぶには」(6/29)
3 前回の解決策の振り返り	7 振り返り	3 「最後まで聞くには」(5/25)	7 「下校の仕方について/協力するには」(7/6・7/20)
4 議題の提案と共有		4 「誰とでも仲良くするには」(6/10)	

④ 「ステーション授業構想」における学習場面(協同学習)

本研究では、ペアやグループでの学習等で互いに学び合う学習を「協同学習」とする。そして、学級活動で学んだ大切にしたい価値やスキルや態度を意識させながら協同学習を定期的に行う。そうすることで、価値やスキルや態度の般化・定着と「ステーション授業構想」のコンセプトの1つ「③日常化」をねらう。

⑤ 「ステーション授業構想」における生活場面

生活場面では、朝の会・帰りの会などでの学級目標をもとにした1日の振り返り活動や係活動、当番活動、掲示物での児童の行動の価値付け等を行う。そうすることで、大切にしたい価値やスキルや態度の般化と価値の内在化をねらう。これらの手立てにより、「ステーション授業構想」のコンセプトの1つ「③日常化」が保障される。

(3) 効果の測定材料と分析方法

① 学級満足度尺度

5月から7月末までの児童個人や学級の認識の変容を測るために、「Q-U」の「学級満足度尺度」を用いた。承認得点と被侵害得点の下位尺度に対して4件法で答えた。分析には「js-STAR」の対応のあるt検定(参加者内)を用いる。

② 「ステーション授業構想」の取組についての自由記述

「ステーション授業構想」の取組にどのような良さを感じたかを把握するため自由記述を実施する(図2)。「ステーション授業構想」の取組の良さを感じた児童のみが記述回答するようにした。分析には、KH Coder Ver. 3(以下、KH Coder)を用いる。この分析により、客観的な計量的分析や関連が強い語同士を線で結ぶ共起ネットワークが作成できる。

SSTやクラス会議、みんなで学び合う学習の良さを感じましたか。「はい」か「いいえ」のどちらかに○をつけましょう。「はい」の人は、どのような良さがありましたか。「いいえ」の人はその理由を書きましょう。

図2 児童アンケート内容

③ エピソード分析

大切にしたい価値やスキルや態度を習得・活用する児童の様子を見取るため、児童の発話をビデオカメラやICレコーダー、フィールドノーツ等で記録する。その後、児童の様子をエピソードとしてまとめ、分析する。

3 研究の実際と結果

(1) 研究の実際

① 学級活動(クラス会議・SST等)

写真1のような学級目標をもとにした大切にしたい価値やスキルや態度をレーダーチャートとして掲示し、学級活動で定期的に振り返る等、可視化・意識化を図った。また、朝学活や学級活動でSSTを取り入れ、様々な友達とのかかわりを楽しめるような活動を継続して行った。SSTの絵りレーでは、相手を傷つける言動をしないことと協力することを事前に意識させることで、友達が自分の思い通りの行動をしなくても、友達の頑張りを認めたり、次の人がフォローしたりと温かな雰囲気が醸成されていた。クラス会議では、円になる際に「男女関係なく誰とでもかかわる」ことを意識させることで、男女が混ざり、隣になったことのない児童と隣になるように意識する行動が見られた。また、話を最後まで聞くことを意識させたことで、傾きながら聞いたり、「あ〜」「確かに」等反応しながら聞いたりする姿が見られた。

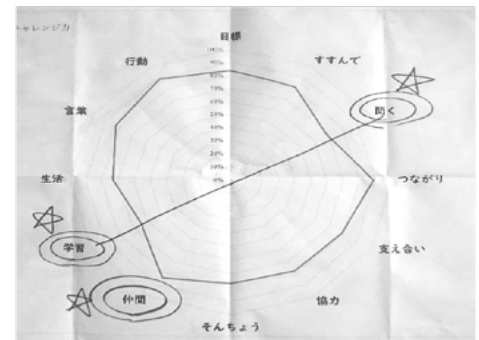


写真1 レーダーチャート

② 学習面

大切にしたい価値やスキルや態度を学習面でも意識付けるために、写真2のように意識付けたい行動を教室に掲示した。そして、教科の学習での友達とかかわる活動の際に、事前に意識させるようにした。国語のインタビュー活動では、相手の話を最後まで聞くことを意識させることで、傾きながら友達の話の聞いたり、友達の話し方の良さを全体の前で紹介したりする姿が見られた。外国語活動では、「男女関係なく誰とでもかかわる」ことを意識させることで、普段かかわらない友達に声をかけてコミュニケーションをとる児童が増えていった。

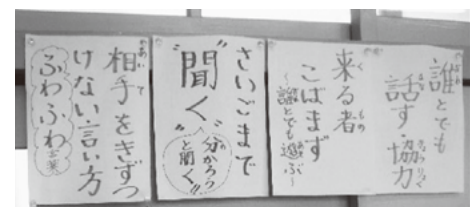


写真2 重点項目のポスター

③ 生活面

帰りの会のグッドニュースでは、その日の友達の良かった行動や感謝したい行動を発表することを推奨することで、「〇〇さんが手伝ってくれました」「今日クラス会議のレクで男女関係なく遊べていました」等、友達の良い行動に注目した発言が多く見られた。また、休み時間の前に「男女関係なく誰とでもかかわる」ことを意識させたことで、普段かかわらない児童数名が集まり、カードゲームで楽しんだり、係活動の活動として、様々な児童がかかわるようなイベントを児童が自主的に開いたりする姿が見られた。

(2) 学級満足度の結果

表3から、承認得点と被侵害得点ともに有意な変容はなかったものの、どちらの値も正の変容をしていることから、「ステーション授業構想」の取組により、相手から認められることや侵害されないことを以前よりも感じるようになったことが窺える。つまり、児童同士が良好なかかわりをしているという認識が高まったことが考えられる。

表3 学級満足度尺度の結果(全体)

	5月		7月		* $p < .05$ ** $p < .01$
	Mean(S.D)	Mean(S.D)	Mean(S.D)	Mean(S.D)	
承認得点全体	18.90(4.65)	19.90(4.28)	19.90(4.28)	19.90(4.28)	1.212n.s.
被侵害得点全体	12.76(5.45)	11.19(4.39)	11.19(4.39)	11.19(4.39)	1.242n.s.

表4から、承認得点と被侵害得点それぞれの平均値以上を上位群、平均値未満を下位群として分析すると、承認得点

には有意な変容は見られなかったが、承認得点の両群ともに正の変容が見られた。このことから、「ステーション授業構想」の取組により、上位群・下位群ともに相手から認められるようになったことが分かる。被侵害得点の上位群においては、負の変容傾向が見られ、下位群においては、有意な正の変容が見られた。このことから、上位群においては侵害されている認識がやや高まり、下位群においては、侵害されている認識が有意に低下したことが明らかとなった。

表4 学級満足度尺度の結果(上位群・下位群)

*p<.05 **p<.01

	5月	7月	承認得点 被侵害得点	上位群N=13 / 下位群N=8 上位群N=10 / 下位群N=11	t値
承認得点上位群	Mean(S.D) 21.85(1.79)	Mean(S.D) 22.38(1.94)			0.766n.s.
承認得点下位群	14.13(3.82)	15.88(3.95)			0.922n.s.
被侵害得点上位群	7.70(1.90)	10.10(4.32)			1.894*
被侵害得点下位群	17.36(2.99)	12.18(4.22)			3.616**

(3) 「ステーション授業構想」の取組についての自由記述

「ステーション授業構想」の取組の良さを感じた児童は21人中17人で、17人の自由記述をKH Coderで分析すると、表5に示すように「思う」「人」「言う」「感じる」「協力」「男女」等が多く抽出された。次に、図3の共起ネットワークを見てみると、「人」「思う」「話す」「言う」が強く結び付いている。このことから、「ステーション授業構想」の取組に、他者と話すことの良さを感じている児童の姿が見て取れる。また、「聞く」「良い」が結ばれていることから、他者と話すだけでなく、他者の考えを聞くことの良さも感じていることが窺える。さらに、「男女」「関係」「目標」「協力」等が結び付いていることから、「ステーション授業構想」の取組において、学級目標の「男女関係なく協力し合う」良さを感じていることが窺える。他にも、「楽しい」「休み時間」「遊ぶ」が強く結び付いていることから、生活場面で友達とかかわる良さを感じていることが窺える。より多く出現した頻出単語についてKWIC コンコーダンスというコマンドを用いて検索すると、「みんなが思ったことが分かって良かった」「意見を言う人の方を向き、みんなでうなずいたり共感したりして聞いていてとてもいいなと思った」「あまりなかったことのない人と隣になるのがいいなと思った」「男女関係なく協力することができていて、班や隣の人と活動するのが早くなっている」「男女関係なくの学級目標に一步近づいた」等が抽出された。これらのことから、「ステーション授業構想」の取組において、児童は、友達と話すことや考えを聞くこと、男女関係なく協力する良さを感じていることが考えられる。

表5 頻度

抽出語	頻度
思う	17
人	16
言う	13
感じる	12
協力	9
男女	8
聞く	8
頑張る	7
教える	7
楽しい	6
関係	6
グループ	5

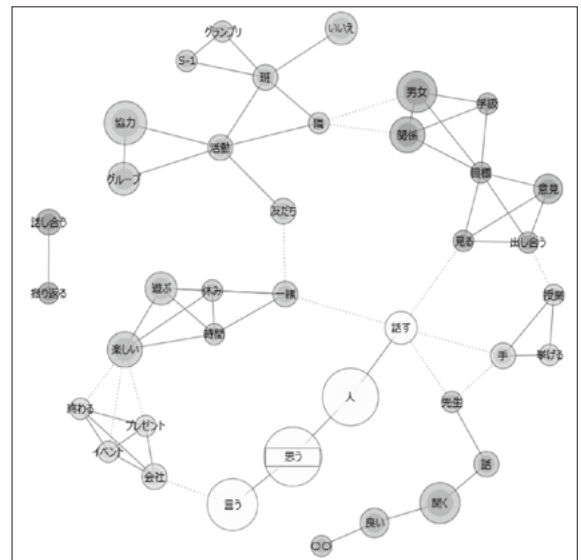


図3 自由記述の共起ネットワーク

一方で、「ステーション授業構想」の取組に良さを感じなかった児童の記述を見ると、「話を聞いてくれなかった」「友達が協力してくれず活動が進まなかった」等、友達とのかかわりにネガティブな認識をもっていたことが窺える。

(4) 「ステーション授業構想」の取組についてのエピソード分析

「ステーション授業構想」の取組で見られた児童の様子を学級活動や学習場面、生活場面に分けて分析する。

① 学級活動(クラス会議・SST)

※(/)…日付

クラス会議	<ul style="list-style-type: none"> ・⑦普段人前で話さない児童が「意識することを1個に絞ったほうがいい」と発言した。その結果、他の児童もそれを承認した。また普段発言しない他の児童もペアの代わりに発表したり助けたりする姿が見られた。担任はそれをもつて価値付けた。また、「クラス会議は一人一人が主役だから一人一人が意見をもちてほしい」と話すことで、全員が意見を発表することができた。(5/19) ・①男女関係なく座れることを意識させて円座にならせた。その結果、少しペア活動でもめるところはあったが、だいたいペアは交互に発表したり話す人考える人で分担して協力して発表したりしていた。(5/25) ・②円になる時、普段関わらない人と進んで隣同士になる児童が多く見られた。また、移動の時も仲間を優先させ仲間を手伝うなど、思いやりのある行動が増えた。(6/10) ・クラス会議中のSSTでは、④児童が提案した「リーダーはだれだ」を行い一番の盛り上がりを見せた。良い雰囲気で行うことができた。(6/15) ・⑧最初の遊びの時も自分たちで多数決をとって決め、楽しむことができた。また、④一人一人の意見を拍手でしっかり認めていた。否定する児童はいなかった。③クラス会議を楽しんでいる様子だった。徐々に自分たちのものになりつつある。(6/29) ・Q-Uの学級満足度が低い児童2名が司会、書記をした。⑨仲間助けられながらだが意欲的に行うことができた。⑩子供を中心に話し合えるようになった。遊びや話し合いを自分たちで進めたいという雰囲気が強まっている。(7/6)
SST	<ul style="list-style-type: none"> ・「絵リレー」「S-1グランプリ」では、③協力することと班で楽しむことを意識させた。それまで班やペアでの活動が上手くいっておらず、「先生話を聞いてくれません」「ひどいこと言ってきました」などのマイナスの印象をもっている様子だったため、上記のような価値を意識させた。その結果、④一番険悪だった班がS-1グランプリや国語のインタビュー活動で一番の盛り上がりを見せた。 ・⑤S-1グランプリで仲間を賞賛する児童が増えた。賞賛することでよい雰囲気になることを価値付けた。(6/22)

下線部㉗～㉙のように児童同士が意見を認め、承認したり賞賛したりしていることが窺える。また、互いに支え合う姿も見られることから、クラス会議で児童が温かな雰囲気や醸成していることが推察される。波線部①～④からは、大切にしたい価値やスキルや態度である「男女関係なく誰とでも仲良くする」を児童が意識している姿が見て取れる。担任も男女関係なく協力することを大切にして取り組ませようとしていることが窺える。太線部⑤～⑩から、クラス会議は、ルールと温かな雰囲気のもと、みんなで楽しめる会議であることを知った児童が、自分たちでこの会議を進めたいという意欲的な態度をとるようになってきていることが窺える。

② 学習場面

国語	<ul style="list-style-type: none"> ・「友達を知ろう(インタビュー活動)」では、㉘友達の話を分かってと最後まで聞くことを大事にした。最初はペア活動を行い、次にグループ活動でインタビューをした。相手のことを知ろうと理由や様子を進んで聞く姿があった。また、楽しみながらインタビュー活動を行えた。(5/18, 5/19) ・総合・国語の遊び発表会では、㉙多くの児童が遊びで気を付けることで「周りのことを考えて行動する」「思いやりをもって行動する」「トラブルにならないようにルールを守る」などの相手意識をもった発表が見られた。(6/10) ・「まいごのかぎ」の授業の際、㉚聞くことを意識することで、傾きや共感、反応が増えた。(6/20)
外国語活動	<ul style="list-style-type: none"> ・今の気分を英語で表現する交流活動を実施した。㉛4/21の交流活動では被侵害得点が高い児童(以下、T)は交流がなかなかできなかったが、今回Tは進んで友達と笑顔で交流することができた。また、「男女関係なく」を事前に意識させることで、以前より全体の交流の幅が増えた。(5/19)
社会	<ul style="list-style-type: none"> ・グループ学習では、㉜分け隔てなく助け合う姿が見られた。事前に学級目標を意識させたことが効いている。また、普段からグループ学習で学び合いを実施していることも影響している。帰りの会のグッドニュースの時、担任は、社会科での児童の助け合いの姿を価値付けた。(6/20)
体育	<ul style="list-style-type: none"> ・タグラグビーの最初は、ルールについて不平不満が出たが、終わったあとに、㉝「ルールの確認タイム」をとり、みんなで改善点を確認したり、良かった行動を共有したりすることで冷静に話し合い活動ができるようになった。(5/26) ・体育の跳び箱の準備の際、㉞全員が分け隔てなく道具の準備をしていた。片付けの時も進んで声を掛け合いながら協力して片付けをする姿が見られた。その場で「誰とでも協力」ができていたことを価値付けた。(6/23)
道徳	<ul style="list-style-type: none"> ・「あめ玉」では、公共の場で気を付けることを話し合った。㉟その中で、相手の話を分かってと聞くことを意識させたことで、共感する児童が多く見られた。また、㊱導入の意見の中で「男女関係なく誰とでも仲良くする」を出す児童や親切にするなどの学級目標を意識した意見が出た。(6/9) ・「金色の魚」では、㊲相手の話を分かってと聞くことを意識させたことで、体を話し手に向け楽しんだり共感したりしながら聞く姿が見られた。その結果、集中力が持続しないTは最後まで自分の意見を発表し、板書をノートに記録していた。(6/16)
総合	<ul style="list-style-type: none"> ・「遊びを通して自分たちや周りを元気にする」をテーマに、町探検での公園で全員遊びを行った。4月の遊びでは喧嘩が2件あった。その後、改善策を話し合った。そして㊳5/8ではトラブルなく仲良く遊ぶことができた。担任はそのことを教室に写真とともに価値付けた。 ・全校での遊びの企画紹介を児童数名が昼の放送で発表した際、㊴間違えても拍手で迎えて励ます等、温かい雰囲気が出ていた。(6/1)

下線部㊵～㊷から、大切にしたい価値やスキルや態度の「友達の話を知ろうと最後まで聞く」「ふわふわ言葉を言う」が意識された児童の姿が見て取れる。その結果、温かい雰囲気が醸成されたり最後まで集中して取り組んだりする等、他の行動に良い影響を与えていることが窺える。波線部⑤～⑨から、大切にしたい価値やスキルや態度である「誰とでも協力する」「男女関係なく誰とでも仲良くする」が意識された児童の姿が見られる。担任は、事前にそのことを意識させてから活動に入らせたり、児童の頑張りを価値付けたりしている。太線部⑩・㊶から、大切にしたい価値やスキルや態度の「相手意識」を考慮した児童の行動が見られる。相手意識をもって行動することで、友達と仲良く活動できることを学んでいることが窺える。

③ 生活場面

帰りの会でのグッドニュース(認め合い活動)等	<ul style="list-style-type: none"> ・被侵害得点の高い児童(以下、A)の水筒が落ちて水がこぼれた時に、㊵周りの半分以上の人が助ける姿が見られた。その結果、その児童は「ほとんどの人が助けてくれてうれしかったです」と発表した。(5/19) ・最近Aへのグッドニュースを多くの児童が発表している。㊶Aは最近、以前まで仲が良くなかった児童(以下、B)と仲良くなり、また、他の児童とも交流する機会が増えてきた。良好なかかわりが増えることで自信を付けているようであった。(6/22) ・帰りの会で、「持ってきてはいけないものを持ってきている」や「机椅子の上げ下げ」「話をしっかり聞く」ことなど、㊷児童同士で改善点を指摘し合う姿が6月下旬から増えてきた。もちろんAも発言するようになってきた。
日直・係活動	<ul style="list-style-type: none"> ・日直を2人体制にすることで、かかわりが生まれるようにした。あまり仲が良くないAとBが日直のペアになった。㊸4月には「冷たく見られた」「さげられた」という訴えがAから伝えられたが、5月には互いに声を掛け合い協力する姿が見られるようになった。 ・2つの係がイベントをした。宝探しを行い、㊹その遊びを楽しみにしていた多くの仲間が参加し、盛り上がった。その主体的な姿を肯定的にフィードバックした。予めクラス会議で決めた「イベントを中心として誰とでも関わる」を意識したことが児童に影響していると考えられる。(5/29～6/2) ・㊺いつも人前で発言しない児童が、初めて帰りの会で配り係からの連絡として、「プリントに名前を書くように」と全体の前で注意していた。みんなの前で話すという自信がついてきたようであった。(6/22) ・㊻6月に入って「人狼」が流行り、男女関係なく遊んでいる。いつもとは違うかかわりができるとも楽しそうである。

波線部⑩～⑭から、係活動や日直活動、帰りの会等で良好なかかわりが増えることで、互いの仲が深まり助け合う姿が見られるようになった。太線部⑮・㊶から、普段人前では発言できない児童が学級で気を付けてほしいことを伝える姿が見られるようになった。

4 結論と今後の課題

「ステーション授業構想」の取組により、児童は自分の考えを話したり友達の考えを聞いたりする良さを感じていた。聞き手が共感的に話を聞くことで話しやすくなり、その結果、話したり聞いたりする良さを感じるようになったと推察される。そして、自分の意見を「聞いてもらえた」「認めてもらえた」という経験により、学級満足度の承認得点の正の変容に結び付いたと考えられる。

次に、児童は学級目標に関連する男女関係なく協力する良さを感じていた。これは、クラス会議やSST等で、「男女関係なく協力する」という大切にしたい価値やスキルや態度を習得し、それらを学習面や生活面で活用する等、教育活

動全体で一貫・継続指導することで、般化・定着したものと考えられる。4, 5月時点では、グループの固定化や分かり合えなさからの児童間でのトラブルがあったが、一貫・継続して「男女関係なく協力する」等の価値やスキルや態度を意識付け、価値付けていくことで、誰とでも協力しようと意識して行動するようになった。また、クラス会議等で習得した「相手の話を分かろうと最後まで聞く」ことにより、学習場面等でも共感的に相手の話を聞くようになってきた。このように教育活動全体で、誰とでも仲良くかかわることを意識したり、友達から聞いてもらい認めってもらったりした経験により、承認得点の正の変容や被侵害得点の下位群の有意な正の変容に結び付いたと考えられる。また、川口・赤坂(2020)は、クラス会議や協同学習での協同のための対人技能を身に付けさせる一貫した取組が、協同に対するネガティブ群の認識を上昇させたことを明らかにした。本研究でも下位群の被侵害得点が有意に正の変容を示した。つまり、「ステーション授業構想」の取組は、つながり協働することに負の認識をもつ児童に対して一定の効果を与えることが分かった。

一方、上位群の児童は負の変容が見られた。要因として、友達とのかかわりの中でネガティブな経験をしたことが自由記述から窺える。そのため、今後の取組として協力体験活動や認め合い活動などを導入し、児童同士の関わりをより高めていくことが必要であると考えられる。次の要因としては、友達との良好なかかわり方を意識する中で児童一人一人のかかわりの基準が厳しくなったことが考えられる。金山ら(2003)が、スキル訓練の結果、自己評定の基準が厳しくなり回答が否定的になると指摘していることからそのことがいえる。

以上のことから、教育活動全体で大切にしたい価値やスキルや態度を一貫・継続指導し、価値付けていく「ステーション授業構想」の取組により、児童が学級目標に関連する価値やスキルや態度を意識して行動し、その積み重ねの中で自分の考えを話したり友達の考えを聞いたりする良さや、男女関係なく協力する良さを感じたりするようになった。その結果、児童間の良好な関係性が生まれ、男女関係なく協力できるようになったことが、学級満足度への正の影響を与えたことが分かった。つまり、「ステーション授業構想」をもとにした教育活動は、児童同士がつながり協働する学級集団育成に有効に機能することが分かった。一方、友達とのかかわりの中でネガティブな経験をしたことや児童一人一人のかかわりの基準が厳しくなったことが学級満足度の一部に負の影響を与える可能性が推察された。

本研究の課題は2点である。1点目は、質的研究の特質上分析に主観が入り込む点や、一事例の調査であるため、一般化しきれない点が課題として挙げられる。今後はさらに、多面的なデータを収集し、客観性を求めた研究を積み重ねていく必要がある。2点目は、調査期間の短さが挙げられる。「ステーション授業構想」について年間を通して調査することで新たな知見が得られると考えられる。

【引用文献】

- ・ 会沢信彦：「学級経営とアドラー心理学」, 会沢信彦, 岩井俊憲編, 『今日から始める学級担任のためのアドラー心理学-勇気づけで共同体感覚を育てる』, pp.25~32, 図書文化, 2014.
- ・ 赤坂真二：「スペシャリスト直伝 学級づくり成功の極意」, pp.57~59, 明治図書, 2011.
- ・ 金山元春・中台佐喜子・新見直子・斉藤由里・前田健一：中学校における学校規模の社会的スキル訓練 広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部第56号 pp.259~266, 2003.
- ・ 川口雄・赤坂真二：「協同のための対人技能を見つけさせる一貫した取組が協同的な学習に対する動機付けの変容に及ぼす影響に関する事例研究」, 上越教育大学教職大学院研究紀要, 8, pp.1~10, 上越教育大学, 2021.
- ・ 佐藤容子・佐藤正二・高山巖：「攻撃的な児童に対する社会的スキル訓練」, 行動療法研究, 19, pp.13~27, 一般社団法人日本認知・行動療法学会, 1993.
- ・ 中央教育審議会：「幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)」, 2016.
- ・ 中央教育審議会：「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して~全ての子供たちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びの実現」, 2021.
- ・ 鳥居明日香・大塚祐一郎・須山諒・深瀬和朗・矢野保志斗・赤坂真二：「共同体感覚を高めるための学級活動を中核としたカリキュラム・マネジメント-「ステーション授業構想」をもとにした取り組みを通して-」, 日本学級経営学会誌, 1.4, pp.37~46, 日本学級経営学会, 2022.
- ・ 保坂康恵：「支持的基盤の醸成とあたたかい学級集団づくり-SSTとSGE指導プログラムにクラス会議を併用した効果について-」, 上越教育大学学校教育実践研究センター, 教育実践研究 21, pp.221~226, 2011.
- ・ 文部科学省：「小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 総則編」, pp.34~38, 東洋館出版社, 2017.